



Tokyo, JAPAN

アメリカ留学自己変革記 (2)

早稲田大学政治経済学部4年

宇野 真弘



Wisconsin, U.S.A.

2008年9月から2009年6月まで、大学の交換留学プログラムを利用して、ウィスコンシン州のローレンス大学に留学しています。この留学の目的は「自己変革」を起こすことです。その体験を記していきます。

こんにちは。私の留學生活がついに始まりました。ローレンスに来てからもうすぐで一ヶ月になります。授業も始まり、生活のリズムができてきました。今のところ私の生活は、フレッシュマンスタディーズを中心に回っています。フレッシュマンスタディーズとは、リベラルアーツ教育を掲げるローレンス教育の基礎をなす授業です。また、大統領選挙にも注目しています。

今号では、フレッシュマンスタディーズへの私の取り組みを中心に述べ、さらに、大統領選にたいする学生の考えについても書きたいと思います。

フレッシュマン・スタディーズ

その① - 知的快感 -

この授業では、科学や音楽を題材にして議論します。たとえば秋学期では、カフカの『変身』、アインシュタインの『相対性理論』、メシアンの『世の終わりのための四重奏曲』、プラトンの『国家』、エリザベス・ビショップの詩集が課題となっています。今の時点では、『変身』を終え、『相対性理論』をテーマにしています。一作品ごとに一回、大講堂でレクチャーが行われるのも特徴です。毎回違う教授が、すべてのフレッシュマンを相手に、論点やさまざまな見解、著者のバックグラウンドなどをプレゼンします。

なぜ私が力を入れているかという、今までしたことのない勉強の方法に、知的なおもしろさを感じているからです。知的な面白さは、早稲田大学でも感じるがありました。たとえばゼミでは、さまざまな大著を読み込んできました。マルクス、ウェーバー、アレント、フーコー、ベネディクト・アンダーソン、福沢諭吉、アマルティア・センなど。著者の言わんとすることを理解していく過程では、なるほどというようになりました。しかしここには、それ以上の快感があります。早稲田大学では一人で大著にぶつかっていくというスタイルでした。けれどもローレンスでは、フレッシュマン全員でぶつかっていき、不明瞭な点や疑問点に関して授業外でも議論することで、理解を深めたり、新たな視点を見出したことがあるからです。

カフカの『変身』は、一言で言えば次のようなお話です。ある朝起きると、主人公のグレゴールがベッドの上で虫の体をしているのに気づく。そんな彼をとりまくザムザ一家の様子を描いたストーリーです。着眼点は数多くあります。グレゴールの正体、大きさ、家族のグレゴールに対する接し方の変化、生活状況の変化、家族の内面の成長、グレゴールの部屋にかけられた女性の絵、コミカルともいえるカフカの描写など。私は、妹自身の内面の変化に着目していました。読んで議論していく中で、グレゴールの部屋にかけられた絵がグレゴールの性的な衝動と関係があるのではないかという意見に刺激を受けて、グレゴールの妹に対する執着のなかに性的な意味合いがあるかもしれないと考えるようになりました。

それが正しいか否か別として、私にとっては友人との議論が新しい発見のきっかけとなりました。著者の主張や発見を一方向的に受け取る形ではなく、刺激あいながら、自分なりの新たな発見が生まれる。これがフレッシュマンスタディーズの快感の秘密だと思っています。

